

授 業 科 目 の 概 要					
(保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻)					
科目 区分		授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
一般教育科目	科学的思考の基盤	安全学	将来医療職に従事する学生が安全学に関する基本的素養を身に付けることは必須のことである。本授業は安全学で重要とされる内容を修得させることを目標とする。 安全の基本概念、リスク表現と安全目標、ハザードの同定、確率論的安全評価、事故分析、ヒューマンファクター、リスクマネジメント、リスクコミュニケーション、安全規制、安全システム、安全文化について教授する。	別表 1 科学的思考の基盤	
一般教育科目	科学的思考の基盤	教育原理	教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想について学ぶ。具体的には、日本における教育の理念および歴史・思想について学ぶとともに、現代における教育のあり方や役割・使命について学ぶ。現代の学校が抱える諸問題、たとえば、いじめ・不登校・高校中退・教師の体罰・校則と管理・保護者の対応などの諸問題について、具体的な事例を通して学び、これからの教育のあり方について考える。	別表 1 科学的思考の基盤	
一般教育科目	科学的思考の基盤	教育方法論	学校教育における授業をいかに行うのか、授業の中で児童・生徒は何を学んでいるのか、教師は授業で何を教えるべきなのか等について、具体的な授業の事例をもと考える。「教育実践」や「授業」とはどのようなことか等、これらの意義、歴史的変遷を理解し、児童・生徒が意欲的・主体的に取り組むことのできる授業を実践するために必要な教育の方法と技術について学習する。特に現代はコンピューターなどの情報機器が発達しているので、これらの情報機器の有効な活用法についても学ぶ。	別表 1 科学的思考の基盤	
一般教育科目	科学的思考の基盤	統計学	医療分野では日常多くのデータに出会う。それらのデータを解析して意味のある内容を導き出すことが必要になることがある。その際統計学が役立つ。本授業は記述統計学と推測統計学の理解とそれらの応用ができるまでを目標とする。 統計学とは何か、データの整理、平均値、分散と標準偏差、母集団と標本、正規分布、t分布、カイ二乗分布、F分布、母数の推定、仮説検定、分散分析、相関と回帰、保健統計について教授する。	別表 1 科学的思考の基盤	
一般教育科目	科学的思考の基盤	情報科学	現在、看護やリハビリテーションの分野に於いてもいたるところでコンピューターが使われ、それに関連する知識が求められている。本授業は情報の基礎知識と情報処理技術を修得させることを目標とする。 情報とは何か、情報の表現、情報科学の歴史、ハードウェアとソフトウェア、ネットワーク、ユビキタス、数値シミュレーション、コンピュータグラフィックス、医療分野の電子情報技術、表計算ソフトExcelを使ったデータの統計処理方法について教授する。	別表 1 科学的思考の基盤	
一般教育科目	科学的思考の基盤	人間工学	人間工学は、人に優しい技術、使いやすい機器、生活しやすい環境を創るために生まれてきた学問であり、いろいろな分野で広く応用されている。現代はコンピュータ技術、情報科学、システム工学などの進歩によって人間と機械との境界がなくなり、人間と機械・機器・システムの関係が変化してきている。 人間と機械の関わり、人間の運動特性と心理・感性、人間工学の応用とヒューマンインターフェース、医療技術と人間工学などについて、具体例に基づいて学ぶ。	別表 1 科学的思考の基盤	

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
一般 教育 科目	人間 と 生活	心理学 現代の心理学は、人間についての科学的で総合的な理解を目標に、心の働きと行動について研究する学問である。治療やケアの対象となる人間の心理や行動を追及し、多面的に理解するための心理学の基礎（知覚や感覚、学習、記憶、情動や動機付け、思考や言語、発達、性格）を学ぶ。 また心理学を学習することで、自己理解や自己統制を助け人間形成にも役立てる。心理学の基礎知識、方法論を学習し、自他の理解について、心理学的なアプローチがあることを学習する。	別表 1 言語聴覚療法の基盤	
一般 教育 科目	人間 と 生活	生命倫理 遺伝子の化学的本体と機能が明らかになり、個体発生・個体の行動・社会形成などの高次の現象の基本設計も遺伝子情報にあることが浮き彫りにされた。また、生命科学の発達は新しい生命工学技術を生み、それを駆使して医療分野も著しい変革を遂げつつある。 先端医療技術の発達に伴って、生と死をめぐる考え方や医療従事者と患者の関係の有り方に大きな変動が起きており、生命倫理の諸問題が様々な議論を呼んでいる。 生命倫理学という新しい学問が成立してきた歴史的背景を追い、先端生命技術の現在を展望し、具体的な問題に即しつつ生命倫理について考える。	別表 1 言語聴覚療法の基盤	
一般 教育 科目	人間 と 生活	英語Ⅰ（社会と文化） 高校で学んだ基礎的知識を補強しつつ、基礎レベルの英文読解力・聴解力・英文作成能力・英会話力の充実を図ることを目的とする。日常的な文化・社会・国際問題などや学生が関心を寄せることができる身近な話題に関する英文のエッセイや記事を題材にして、語彙力の増加と基本的な構文の再確認及び英文の反復練習に重点をおきながら、上記の四つの英語コミュニケーション能力をバランスよく身につけられる学習を行う。	別表 1 人間と生活	
一般 教育 科目	人間 と 生活	英語Ⅱ（健康と医療） 看護とリハビリテーションの領域における医療英語の読解・聴解・英文作成・英会話の四分野の基本的英語コミュニケーション能力の育成を目的とする。平易な英文で書かれた医療関係の情報の収集方法の習得と、英文記事などを読解するために、かつ簡単な英文を作成するために基礎的な医療英語の語彙・用語と文章表現を学習する。また臨床現場で簡単な英会話もできるように、医療英会話の基本的表現の聴解と運用の学習を行う。	別表 1 人間と生活	
一般 教育 科目	人間 と 生活	英語Ⅲ（総合演習） 「英語Ⅰ」と「英語Ⅱ」の学習を基にして、医療・看護領域での総合的でより高度な英文読解力・聴解力・英文作成能力・英語によるプレゼンテーション能力の獲得を目指す。英文で書かれた医療・看護関係の論文・報告書・エッセイなどの読解を重点的に行う。また、論文の英文抄録記述のために、英文作成を実践する。さらに、これらの学習を通して、英語でのプレゼンテーション能力も育成する	別表 1 人間と生活	

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
一般 教育 科目	人間 と 生活	英会話（医療系英会話） 「英語Ⅱ」と同時進行的に、日常生活と医療現場における英語によるコミュニケーション運用能力の充実と発展を図る。 日常英会話と臨床英会話の基本的及び発展的表現を反復練習して身につけ、それらをロールプレイングやドラマパフォーマンスなどの様々な英語運用方法を通して、日常や国際的な場で遭遇する外国人の患者や医療従事者との意思疎通が臆せずに行える英語コミュニケーション能力を修得する。	別表1 人間と生活	
一般 教育 科目	人間 と 生活	スポーツ指導者がスポーツ医学に関する知識を持つことの重要性について理解を深め、スポーツ活動と健康（QOL）との関わりについて学ぶ。スポーツ活動中に多いケガや病気について、その発生の原因や症状について理解し、スポーツ指導者としての対応の仕方について学ぶ。スポーツと精神医学の関わりや、精神障害者スポーツについて学ぶ。 （オムニバス方式／全15回） （全12回） スポーツに関する医学的知識、アンチ・ドーピング、障がい者とスポーツについて学ぶ。 （全3回） スポーツと精神医学の関わりや、精神障害者スポーツについて学ぶ。	別表1 人間と生活	
一般 教育 科目	人間 と 生活	スポーツ栄養学 健康保護、健康増進、さらにはスポーツ活動・運動を支える栄養摂取についての基本的な知識を得るとともに、日々の食事を規則正しく摂取することが健康的なスポーツライフをマネジメントするための第一歩であることを学習する。また、水分補給の重要性についても学習する。 競技者に対する栄養指導の大切さを理解させるとともに、スポーツにおける栄養の役割と関係する栄養素との関連についての知識を高める。競技者の望ましい食事及びトレーニングの目的にあった食事の取り方について理解を深める。	別表1 人間と生活	
一般 教育 科目	人間 と 生活	体育Ⅰ 身体の発育発達と機能について理解を深め、生涯を通じて身体的・精神的・社会的な健康の維持増進や自己管理に資する基礎的な知識の習得や態度を教授する。また、生涯にわたる心身の健康の保持増進や豊かなスポーツライフの理解を深める。	別表1 人間と生活	
一般 教育 科目	人間 と 生活	体育Ⅱ スポーツの意義を理解し、健康の保持増進とともに、体力の向上、人間関係の形成、さらにはスポーツの普及や振興について、実際にスポーツの体験を通して学ぶ。また実際に各種スポーツを体験することにより、スポーツの楽しさを理解する。	別表1 人間と生活	

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
一般 教育科目	社会の 理解	フレッシュャーズセミナー I 新入生を対象とした必修科目であり、大学での4年間の学生生活をより実り豊かなものとするために必要とされるさまざまな知識やスキルを身につけることを目的としている。 内容としては、基礎学力向上する目的で、人体の構造に関する課題を与え、課題を遂行する事で知識の定着を図り、今後の勉学のモチベーションの向上を図る。そして、授業を行う中での医学的レポートの書き方、図書の活用方法を教授し、スムーズな学業への移行を支援する。 また、患者接遇マナー、キャンパスハラスメントに対する対処法、学生を取り巻く課題としての消費者問題への対処法やアルコール依存、薬物依存などを防ぐための対処法、そして通学における車社会への対応、交通安全等に関する講義等を行い、4年間の学生生活への支援を行う。	別表1 社会の理解	
一般 教育科目	社会の 理解	フレッシュャーズセミナー II 専門職としてのアイデンティティの確立は、4年後の国家試験に向けて重要な学修のテーマである。専門職としてどうあるべきか、専門職として必要なことは何か、互いを尊重しながら、グループワークを通して確立する。 最後にそれぞれの課程で臨床・臨地実習が行われているが、臨床の指導者からは、専門職として学生に求めているものがある。それらについてグループワークを通して理解を深め、プレゼンテーションする。また臨床においては、報告書の作成も必須であり、報告書の基本について学修する。 (オムニバス方式／全15回) (全2回) 理学療法士の仕事内容について説明し、関連医療職との連携をどのように行っているか教授する。 (全2回) 作業療法士の仕事内容について説明し、関連医療職との連携をどのように行っているか教授する。 (全2回) 言語聴覚士の仕事内容について説明し、関連医療職との連携をどのように行っているか教授する。 (全2回) 看護師の仕事内容について説明し、関連医療職との連携をどのように行っているか教授する。 (全7回) 医療現場において連携を求められる場面について考え、医療現場における連携の実際、必要性について理解する。また、変化する医療現場に応じて新たな連携のあり方を模索する意識の獲得を図る。医療現場における組織全体との調和・連携、医療関連職種との連携、病院と地域との連携について教授する。	別表1 社会の理解	
一般 教育科目	社会の 理解	人間関係論 医療に従事する職業には、その基礎に人間関係がある。この授業では人間関係の基礎的な考え方、基礎的な技術について教授する。人間関係の諸相を理解することで、より良い人間関係を構築するための基礎的な知識やスキルを修得し、それを日常の行動に活用できることが目標である。	別表1 社会の理解	

授 業 科 目 の 概 要					
(保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻)					
科目 区分		授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
一般 教育 科目	社会の 理解	日本国憲法	日本国憲法に関する基本的な知識を習得し理解することを目的とする。戦後日本の平和と民主主義の理念のもとに平和憲法である日本国憲法が制定された歴史を踏まえ、私たちの生活と権利を守る日本国憲法の基本的人権の精神を学び、日本国憲法を実際の生活に活かすことを目指す。同時に憲法は国家の動向を監視する役割もあり、国家のあり方を監視し私たちの生活と権利を守る存在としての日本国憲法の歴史的・現代的意義を学ぶ。	別表 1 社会の理解	
一般 教育 科目	社会の 理解	コーチング論	近年コーチングという概念は大きく変化しつつある。長年、人の才能は「遺伝か環境か」と論争に終止符が打たれ、「環境とプロセス」とであると言う。従来のコーチング論を理解し、新たな論点にも言及していく。 コーチングの手法はコーチの人間観によってもパフォーマンスが左右される。人間が持つ本来の力をいかに発揮させるがコーチングの姿である。 講義では、理論とトレンドな情報、映像を交え、時には従来の精神主義、根性主義的なコーチングと現在のコーチングとの比較を試みながら、あるべきコーチングのあり方、効果的なコーチング手法を講義し時にはロールプレイを行い実践者としての理解を深めていきたい。 毎回レポートの提出を行い、コーチング理解の進捗状況を見極めながら講義を進める。	別表 1 社会の理解	
専門基礎 科目	人体の 構造と機能 及び心身 の発達	解剖学総論	人間を対象としその障害を治療する仕事においては、人体の構造と機能を理解することが重要である。解剖学の学習は、人体の構造と機能の理解には欠かすことができないものであり、各部の名称を理解し記憶することが基本となる。解剖学専門用語の理解のみならず、骨学、筋学、靱帯学、神経学、呼吸循環学、内臓学における基本事項を理解することを目的とする。 また、諸構造を構成する細胞や組織についても学び、機能との関連についての理解を深めるように努める。	別表 1 人体のしくみ・疾病 と治療	
専門基礎 科目	人体の 構造と機能 及び心 身の発達	解剖学演習Ⅰ	理学・作業療法学は人間の各関節を動かし、治療する手段をもっている。各関節について理解するためには、骨の形態を記憶し、体表面から骨の形態を理解しながら関節を動かすことが重要である。脊柱・上下肢模型のスケッチを行うことで複雑な関節構造の特徴と動きの制限がどのような原因により生じるか理解する。		
専門基礎 科目	人体の 構造と機能 及び心 身の発達	解剖学演習Ⅱ	人の動きの基本は、骨、関節を動かすことである。その動力源としての筋について、走行・働き・収縮状態を理解することが重要である。ここでは筋の付着部位、筋の収縮によって起こる運動、筋を支配している神経について理解することを目的としている。		

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
専門基礎科目	人体の構造と機能及び心身の発達 解剖学演習Ⅲ	リハビリテーションにおいて重要な位置を占める運動器（骨格・関節・靱帯・筋肉等）と深く関与する神経系を学習し、それらの形態と機能を理解し、専門科目の学習のための基礎知識を修得する。さらに人体そのものの理解に努めることを目指す。 また、生体反応に深く関わる自律神経系についての理解を深め、その障害によりどのような症状が現われるのかについて考える。		
専門基礎科目	人体の構造と機能及び心身の発達 生理学	人体を構成する細胞の機能に始まり、細胞が集まって構成される器官、臓器の機能、それらの相互作用や統合によって支えられる正常な体の機能とその恒常性維持の仕組みについて解説する。本講義において特に、循環器系、呼吸器系、消化器系、泌尿器系、代謝・体温、の働きについて解説する。また、普段、われわれの体で起きている生理現象についての事例や、病態における生理現象についてグループワークで問題に取り組み、科学的思考能力や発表能力を養う。	別表1 人体のしくみ・疾病と治療	
専門基礎科目	人体の構造と機能及び心身の発達 生理学演習	人体を構成する細胞の機能に始まり、細胞が集まって構成される器官、臓器の機能、それらの相互作用や統合によって支えられる正常な体の機能とその恒常性維持の仕組みについて解説する。本講義において特に、内分泌系、運動器系、神経系、感覚系、生殖系、の働きについて解説する。また、普段、われわれの体で起きている生理現象についての事例や、病態における生理現象についてグループワークで問題に取り組み、科学的思考能力や発表能力を養う。		
専門基礎科目	人体の構造と機能及び心身の発達 運動学	身体の運動メカニズムを理解する上で必要な運動学を学習する。身体運動の理解に必要な物理学や生体力学の知識を整理し、生体の構造や機能について理解を深める。 まず、生体力学の基礎を学び、それを元に、生体の構造と機能、四肢と体幹の運動へと学習を進める。また、理学療法学、作業療法学においては、障害者の異常動作を解析することで、メカニズムを理解し治療に応用する。運動動作分析の基礎を学ぶとともに障害者の体力を評価する手法、運動処方についても知る。		
専門基礎科目	人体の構造と機能及び心身の発達 運動学演習（バイオメカニクス）	四肢・体幹の運動学を基礎として、人間の動きを運動・動作分析の手法を用いて解析する。 運動・動作課題にともなう生体力学（バイオメカニクス）を視覚的などの主観的解析と種々な動作分析機器を用いた客観的解析を行い記録・分析する。		

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
専門基礎科目	人体の構造と機能及び心身の発達	人間発達学 人間を生涯にわたり発達する存在としてとらえ、生命の誕生から小児期、青年期、成人期（老年期）を経て死に至るまでの量的・質的变化について学ぶ。ライフステージの各時期に発現する行動を広く、深く理解し、各時期に生じやすい発達上あるいは健康上の課題とその解決法について考える。 （オムニバス方式／全15回） （全5回） 総論、発達の要因、発達理論、人間発達の見方、発達検査の進め方について教授する。 （全10回） 胎児期・新生児期、乳児期、幼児期前期・後期、学童期、青年期、成人期、老年期、身体運動機能と構造の発達、知覚・認知機能の発達、情緒・社会性の発達について教授する。	別表1 心の働き	
専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	臨床心理学 臨床心理学とは、心理学を中心とした知識や理論を用いて、こころの問題を抱えたり、さまざまな生活上の問題に苦しむ人たちの現状と背景を理解し、その援助について研究・実践する学問である。本講義では人間理解の手がかりとなる諸理論を学び、人が適応・成長するとはどういうことかを考える。また、心理検査、心理療法の基本的な成り立ちについて説明する。 講義の後半では、基本的な心理的介入の技法について、演習も交えながらできる限り具体的に伝えたい。さらに臨床心理学の実践領域のいくつかを取り上げ、それぞれの対象者や留意点について学ぶ。	別表1 心の働き	
専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	内科学Ⅰ リハビリテーションに必要な内科的疾患の概要、病態、診断、治療を学習し、治療法に関しては、疾病の病態、症状と理学・作業・言語聴覚療法の関係を理解する。 疾患としては、呼吸循環系、血液・造血系、消化器系の各種疾患について学ぶ。	別表1 人体のしくみ・疾病と治療	
専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	内科学Ⅱ リハビリテーションに必要な内科的疾患の概要、病態、診断、治療を学習し、治療法に関しては、疾病の病態、症状と理学・作業・言語聴覚療法との関係を理解する。 （オムニバス方式全15回） （12回） 成人における腎尿路系疾患、電解質および酸塩基平衡の異常、代謝・内分泌疾患について学ぶ。 （3回） 小児疾患について学ぶ。	別表1 人体のしくみ・疾病と治療	
専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	臨床神経学 神経疾患に関する正確な知識を得るために、神経解剖、局所解剖、病態生理をもとに神経症候について理解する。また、主要な神経症候の診かたと正確な神経学的検査法を学習することで、各種神経疾患の診断に結びつく基礎を身につける。	別表1 人体のしくみ・疾病と治療	

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	臨床神経学 臨床神経学演習	臨床神経学で学んだ神経症候の臨床検査法を演習する。具体的には、運動麻痺、運動失調、錐体外路症候、痙攣とミオクロヌス、筋萎縮、脳神経障害、意識障害、自律神経症候などの鑑別法について学ぶ。 画像検査、電気生理学的検査について学び、神経症候の特徴的所見について理解する。	
専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	整形外科学	四肢外傷、脊椎疾患と外傷、脊髄疾患と脊髄損傷、末梢神経の疾患と損傷、神経筋疾患、膠原病、アレルギー・免疫疾患、内分泌・代謝・栄養疾患等のリハビリテーション医学と密接な関係にある整形疾患についての理解を深める。また、整形外科の基礎を理解するために、整形外科的診断法、整形外科的治療手技、手術法、機能障害の回復を目的とした機能再建術等について学ぶ。	
専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	スポーツ整形外科	アスレティックトレーナーが活動を行う上で必要なスポーツ外傷・障害の基礎的知識について理解する。そのために、上肢・下肢・体幹の主なるスポーツ外傷の病態、評価方法及び、重篤な外傷、年齢、性差によるスポーツ外傷の特徴を習得することをねらいとする。	
専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	精神医学	精神医学の概念を学び、精神症状の特徴を理解する。疾患としては、統合失調症、躁うつ病、てんかんを中心にその評価診断法、治療法を学ぶ。 精神医学とは、精神疾患の診断・治療を担当すると同時に、精神症状で苦しんでいる人々のこころを理解し、必要な援助を行うことである。対象となる患者の身体のみならず精神状態や、おかれている社会的状況を正確に把握する資質を養うことも重要である。また精神障害者が地域社会で生活するうえでのリハビリテーションについても理解することが肝要である。	別表1 人体のしくみ・疾病と治療
専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	病理学	病理学は疾病(病気)を理論的に体系づけた学問であり、具体的には疾病の原因、本態、病変、経過、予後などについて学習する。病理学総論と各論に分けて行う。 総論では、萎縮、変性、壊死、代謝障害、肥大、再生、肉芽組織と創傷治癒、化生、移植、異物の処理、傍側循環、貧血、充血、鬱血、出血、ショック、血栓症、塞栓症、梗塞症、体液循環障害、炎症、自己免疫疾患、特殊性炎症、腫瘍等について、理解を深める。 また、各論では、それぞれの症状がみられる疾患について学習し、診断と外科的治療法について学ぶ。	別表1 人体のしくみ・疾病と治療

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	リハビリテーション医学は様々な疾患により発生した、身体的、心理的障害に対して、正しい診断と評価を行い、早期の社会復帰を目標に行う医療である。リハビリテーションで行われている評価手技を理解し、代表的疾患についてのリハビリテーション医学診断学の基礎的知識を獲得する。 また日本におけるリハビリテーション専門医制度を理解し、急性期リハビリテーション、回復期リハビリテーション、維持期リハビリテーションにおける専門医とのかかわりについて学ぶ。	別表1 人体のしくみ・疾病と治療	医用画像の評価を含む
専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	リハビリテーション医学における代表的疾患である脳卒中、脳性麻痺、脊髄損傷、慢性関節リウマチ、呼吸循環器障害に対する評価治療についての理解を深める。特に、それぞれの疾患に共通の合併症については、その発生機序、予防的観点について、症例を通して学習する。 また虚弱老人に対する予防的側面を踏まえた転倒予防に関する取り組みについても学習する。		
専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	対象者の健康状態を把握し、その健康レベルに合わせて、健康生活の維持・増進・回復への援助について教授する。さらに、その中で必要となる栄養は、個人が抱える健康障害との関連も大きいので、多角的に栄養に関するアセスメントができるための基礎知識、療養生活と栄養、食事指導等について教授する。 （オムニバス方式全8回） （4回） 栄養状態の評価と栄養摂取量、病院食の特徴と種類、摂食・嚥下障害や代表的生活習慣病を含む各種疾患の栄養食事療法の原則と実際、高齢者の特徴と栄養の基本等について教授する。 （4回） 代表的生活習慣病を含む各種疾患の栄養食事療法の原則と実際、妊産婦・小児の特徴と栄養の基本、褥瘡対策やNSTの活動等について教授する。		
専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	医療において薬物療法は重要な治療法である。医療従事者は患者の状態をアセスメントし指導する上で、また、医療事故を防止するためにも薬物に関する知識が不可欠である。医療的ケアを行う上で必要な薬理の知識をまとめて学ぶ。 内容は、薬物の作用と体内動態、薬効に影響する因子、薬の有害作用、抗腫瘍薬、抗感染症薬、中枢神経作用薬等である。		

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	救急処置 日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナーの役割における「救急対応」の位置づけを理解したうえで、医療資格保持者へ引き継ぐためにできる最高レベルの救急対応の実践的な知識、態度や技術を習得することをねらいとする。合わせて、スポーツ活動現場における救急対応の特性と意義を理解することをねらいとする。具体的な目標を次のようにあげる。 スポーツ現場における救急対応の考え方を理解し、外傷、障害の評価や基本的な救急対応について説明・実践できる。また、内科疾患に対する救急対応について説明・実践できる。	別表1 人体のしくみ・疾病と治療	救急救命の基礎的知識を含む
専門基礎科目	保健医療福祉とリハビリテーションの理念	リハビリテーションの歴史、概念、理念および、その仕組みについて理解する。具体的にはリハビリテーションの定義から始まり、リハビリテーションの諸相である、医学的リハビリテーション、教育的リハビリテーション、職業的リハビリテーション、社会的リハビリテーションの違いについて学習する。また、障害の分類については、ICFの分類を中心に、現在の患者の置かれている状況を把握する。 その他、リハビリテーションチームの役割、QOL、保健医療制度、公的介護保険制度などについて学ぶ。	別表1 社会保障・教育とリハビリテーション	
専門基礎科目	保健医療福祉とリハビリテーションの理念	保健医療論 人々の健康を保持・増進するために、これまでの保健・医療・福祉に新しい発想が求められ、時代とともに制度改革がなされている。医療職として人々の健康を支援するには、保健・医療・福祉制度を総合的に理解し、それらを調整できる能力が求められている。 また、医療職は人の心に直接ふれる仕事である。医療の変遷から、生命倫理や患者の権利、価値観や人格を尊重した医学的ケアについての考えを深め、専門職としてのアイデンティティを形成する基盤とする。 内容は、健康な生活と保健・医療・福祉、保健・医療・福祉の動向、現代医療の特性と医の倫理、インフォームドコンセント、情報開示、QOLである。	別表1 人体のしくみ・疾病と治療	
専門基礎科目	保健医療福祉とリハビリテーションの理念	チーム医療論 医療に携わる専門スタッフには、職能の発揮だけではなく、相互理解と綿密な連携によるチームアプローチが求められる。そのためには、各専門スタッフの職域を理解し、それぞれに課された役割を理解する必要がある。 内容は、チーム医療の歴史、必要性、実際、各専門職域と役割、医療現場、在宅現場における事例を提示し、それぞれの職種の関わりを教授する。	別表1 社会保障・教育とリハビリテーション	

授 業 科 目 の 概 要					
(保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻)					
科目 区分		授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
専門基礎科目	保健医療福祉とリハビリテーションの理念	環境と健康	環境の変化は人々の健康に影響し、社会的な問題となっている。また、人口動態の変化や疾病構造の変化も社会的な問題となっている。人々の健康な生活を支援する者として、これらに関する知識をもち広い視野で医療技術を考えなければならない。ここでは「環境」をあらゆる角度から捉え、健康に及ぼす影響と健康を保つための施策を理解し、医療技術に活用できる能力を養う。 内容は、生活環境と健康、教育環境と健康、労働環境と健康、人口動態と健康指標、疾病予防と健康管理、健康と衛生行政等である。		
専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	ナラティブ概論	NBM（Narrative Based Medicine、物語りと対話に基づく医療）は対象者が抱える問題を本人の語りを通して本人を把握し、治療する医療である。リハビリテーション医療の導入には、対象者との関係性が大切な鍵となる。その基本的な姿勢として対話と物語りを意識化することから始まる。 ナラティブ理論の基礎を学習し、臨床場面で実践ができるように演習を行う。対象者の小さな言動の捉え方と、それらを積み重ねる作業のポイントをおさえ、対象者の気持ちに寄り添うアプローチを身につけられるように指導する。また、学生自身が人生の肯定感、その共有、自分の人生ストーリーへの影響、その物語の方向性などを考えられるように教授する。		
専門基礎科目	疾病と障害の回復過程の促進	社会保障制度	コミュニケーション障害者が置かれている様々な環境を理解し、言語聴覚士がコミュニケーション障害者に最善のサービスを行うために、社会保障制度の知識は必須である。現在の社会保障制度の構成と制度を学び、社会福祉の法律が運用どのように運用されているかを理解する。また、実際の障害者に関する施策と実施体制を理解する。さらに、介護保険を始めとする介護保障とその制度の運用を理解する。その上に、直接援助技術、間接援助技術、その他の関連専門援助技術を知る	別表 1 社会保障・教育とリハビリテーション	
専門基礎科目	保健医療福祉とリハビリテーションの理念	スポーツ内科学	本講義では、アスリートにみられる内臓器官などの疾患の病態、症状、対応策・処置、予防措置について理解させることをねらいとする。スポーツ現場および海外遠征時に注意すべき感染症の種別、病態、症状、対応策、処置、予防策について理解させることをねらいとする。アスリートにみられる病的現象など（オーバートレーニング症候群、突然死、過換気症候群など）の病態、症状、原因などを理解させるとともに、それらに対する対抗策・処置、予防措置について学ぶことをねらいとする。この他、スポーツ選手にみられる摂食障害、減量障害、飲酒、喫煙などの問題点について学ぶ。高所、低圧、高圧、暑熱環境などでの運動時における生体の反応、順応、そしてそれらの環境下での障害について学ぶ。本女性、高齢者、発育期の子供の生理的特徴、運動に対する応答、特異的な障害について学習する。メディカルチェックの意義、必要性、その内容、実施方法などについて学習することをねらいとする。アンチドーピングの目的、ドーピングの定義などをアスレティックトレーナーが理解するとともに、スポーツ選手を指導することができるようにすることをねらいとする。		

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
専門基礎科目	保健医療福祉とリハビリテーションの理念	トレーニング科学Ⅱ	体力とは「防衛力」と「行動力」に分けられ、体力の諸要素を高めるために行うトレーニングについて、プログラミングする。 それぞれのトレーニング方法を指導する際に、目的や強化される部位についての的確に示すことができ、正確な方法を指導できる力を身につける。立案されたトレーニング計画を実際に行うには、トレーニング環境、トレーニング負荷の増減、トレーニングに伴う疲労の問題など様々な問題があることを理解し、それらに対処する。	
専門基礎科目	こころと言語の科学	耳鼻咽喉科学	耳鼻咽喉科学の知識は、言語聴覚士にとって、必要不可欠なものといえる。また、その他の専門基礎科目、専門科目を学習していく上でも、基礎となる科目といえる。 ここでは、まず、耳・鼻・口腔・咽頭・気管・食道などの各々の構造や機能について説明する。さらに、それぞれ主要な病態を紹介し、耳鼻科的な検査や診断方法、治療方法について概説していく。将来の臨床現場で必要となる、耳鼻咽喉科学の知識を獲得することを目標とする。	別表1 人体のしくみ・疾病と治療
専門基礎科目	こころと言語の科学	形成外科学	言語聴覚士にとって頭蓋・顔面への深い理解は、欠かせない。ここでは、皮膚の解剖・生理および創傷治癒、組織移植や外傷、熱傷、潰瘍および形成手術、再建手術の総論について学ぶ。また、言語聴覚士に関連の強い疾患である口唇・口蓋裂については、分類・発生・原因とその手術時期・術式について具体的に学習する。 さらに、その他の頭蓋・顔面の先天異常について学び、頭頸部外科手術後の変形および機能障害などについて理解を深める。	別表1 人体のしくみ・疾病と治療
専門基礎科目	こころと言語の科学	臨床歯科学	構音障害・摂食嚥下障害を理解するために、臨床歯科学の知識は必須である。臨床歯科学では、歯科・口腔領域の解剖・生理・機能・疾患および病態の理解を深める。具体的には、口腔領域に含まれる諸器官（特に歯・歯周組織）の構造・機能・発生について学び、齲蝕や歯周病などの病態を理解する。また、顎関節や唾液腺の機能・発生・構造も併せて学ぶ。さらに、口腔ケアや歯科医学的処置についても理解を深める。	別表1 人体のしくみ・疾病と治療

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
専門基礎科目	こころと言語の科学	発声発語（話しことば＝音声の生成）にとって重要な、呼吸、発声、共鳴・調音といった諸過程に関わっている器官とその構造、および神経・筋活動などについて学習する。各器官の構造と運動が、発声発語および摂食・嚥下機能とどう関係しているか理解し、さらに、各器官に生じた形態および運動の異常は正常な発声発語と摂食・嚥下をどのように妨げるかの基本を理解する。 （オムニバス方式／全8回） （全4回） 発声発語器官における正常な運動、神経支配、筋活動について理解を深める。さらに、その器官の異常がもたらす発声発語機能の障害との関係について学ぶ。 （全4回） 摂食嚥下器官の正常な解剖・機能を理解する。それらの器官を制御する神経系の理解し、関係性を学修する。	別表1 人体のしくみ・疾病と治療	
専門基礎科目	こころと言語の科学	脳は約1000億もの神経細胞から構成される情報処理器官である。この神経細胞の複雑なネットワークにより、認知、記憶、思考、言語、感情、意志など、ヒトにとって最も重要な高次精神機能が生まれる。脳はヒトが人間らしく生きるための根幹を成す器官である。言語聴覚療法を行うにあたりヒトの脳について深く学ぶことは非常に重要な要素である。 まず神経科学の入門として脳の神経細胞の働き、中枢神経系および末梢神経系の構造・機能について学び、それらの神経系の病態についても理解する。さらに、神経生理・画像検査についても広く学び、近年の脳イメージング（fMRI、fNIRS、MEG、EEG、SPECTなど）研究から得られた知見からヒトの脳機能についてより深く考察できる能力を養う。	別表1 人体のしくみ・疾病と治療	
専門基礎科目	こころと言語の科学	言語聴覚士の主要な業務は、言語・聴覚のリハビリテーションであり、聴覚障害について十分に理解しておくことが必須となる。多くの聴覚障害は耳疾患由来であり、また原因疾患を十分理解することが、聴覚障害者に適切な訓練・指導を行っていくうえで重要である。 ここでは、耳の基本的な解剖や機能、聴覚検査も含めた検査法を概説する。さらに、聴覚障害をきたす代表的な疾患について解説し、難聴の機序や、難聴の診断までの過程、治療の基本的方法などを理解することを目標とする。	別表1 人体のしくみ・疾病と治療	
専門基礎科目	こころと言語の科学	行動の原理を学び、それを日常の身近な行動に当てはめて考えられることを目指す。人間を含めた動物の行動の獲得・維持・変化・消失に関わる古典的条件づけとオペラント条件づけに焦点を当て、行動がどのような要因の影響を受け変化するかについて理解し、その原理に関連する諸現象を学習する。 さらに、認知とは生体の能動的な情報収集・処理の活動であるため、環境からの情報収集と保存、獲得した情報を加工して新たな知識を作り出す過程などについても学習する	別表1 心の働き	

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
専門基礎科目	こころと言語の科学 心理測定法	心という、直接に観察・測定することはおそらく不可能なものを、私たちはどのようにして観察・測定するのか。その観察・測定の方法を具体的に学習する。心理測定法の論理を理解し、私たちの知覚、認知、動機、感情、欲求、価値、性格など、心のさまざまな側面を測定するために開発されてきた実際の測定方法を体験し、自らが分析し、考察することによって、心理測定法の実際に触れる。さらに、基本的な実験計画方法についても理解を深める。	別表1 心の働き	
専門基礎科目	こころと言語の科学 言語学	言語学の基本的な概念を説明できる。日本語の特色、日本語のシンタックス、語彙、表記法（かな、カタカナ、漢字）などの規則と特徴を理解し、言語レベルの障がいへの検査・評価・訓練に応用できる。 （オムニバス方式／全15回） （全8回） 言語学の歴史および基礎知識について学ぶ。また、言語学の主要な概念（音韻論、意味論、認知言語学を中心）や用語について理解し、言語発達や音韻の障がいとの関連性を理解する。 （全7回） 言語学の主要な概念（形態論、統語論、文字論を中心）や用語について理解し、失語症等言語レベルの障がいとの関連性を理解する。	別表1 言語とコミュニケーション	
専門基礎科目	こころと言語の科学 音声学	言語障害の中の運動系の障害に共通する基礎知識として、発声発語・摂食嚥下の器官の解剖・構造ならびに、機能については総合的に学ぶ。音声の産生の仕方および音声の記述の仕方を、国際音声字母を通じて理解する。さらに、プロソディについて学び、摂食・嚥下との関連性を学び、音声と摂食・嚥下の発達について理解する。	別表1 言語とコミュニケーション	
専門基礎科目	こころと言語の科学 音響学	コミュニケーションの基本となるものは音声であり、音声はコミュニケーションが成立するための重要な要素の一つとなっている。言語聴覚障害の科学的な分析能力を養う上で、音声を持つ物理的特性や音響分析の基礎的知識、種々の音声の音響学的特性や音声分析の方法を学ぶ。 また、音声情報を処理する聴覚機構は脳機能の一つであるが、音声の物理的な変化とは必ずしも対応しない心理的側面を持つ。音の物理的变化に伴う聴覚心理的な変化との対応や聴覚機能のメカニズム、両耳の意義などを学習する。	別表1 言語とコミュニケーション	

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
専門基礎科目	こころと言語の科学 言語発達学	各言語期の発達の特徴が説明できる。 言語獲得を説明する理論について、大まかに述べる ことが出来る。 （オムニバス方式／全8回） （全5回） 子供たちは、誕生後数年のうちに、基本的な言語能力のほとんどを身につけてしまう。なぜ子供たちは言語を獲得できるのか、どのように獲得していくのか、言語発達の道筋について理解する。まず「聞く」「話す」しくみと働き、ことばの生物学的基礎を学習する。さらに、前言語期、語彙獲得期、前期構文獲得期、中期構文獲得期の言語発達を概観する。また、言語発達に及ぼす環境の影響について理解する。 （全3回） 学童期の言語発達を概観する。また、人間に特有の言語獲得の背景にどのようなメカニズムがあるのか、それを説明する理論を学ぶ。	別表 1 言語とコミュニケーション	
専門基礎科目	こころと言語の科学 言語聴覚検査演習Ⅰ（小児）	子どもは日々発達し変化している。そのため子どもの発達段階を理解し、言語領域の発達と関連づけて考えることが必要になってくる。そこで発達検査と、言語発達を支える認知機能を評価する知能検査の概要を学習する。 （オムニバス方式／全15回） （全8回） 発達検査の概要と代表的な発達検査の実施から解釈までを学ぶ。 （全7回） 知能検査の概要と、代表的な認知機能検査の実施から解釈まで学ぶ。	別表 1 言語とコミュニケーション	
専門基礎科目	こころと言語の科学 言語聴覚検査演習Ⅱ（成人）	知能は学習する能力、学習によって獲得された知識および技能を新しい場面で利用する能力であり、このような能力を測定するものに知能検査がある。また、性格に関する側面を把握する評価として人格検査がある。知能や人格の評価は臨床場面でも多く実施されており、症状分析の際の一役を担っている。よって授業では言語聴覚領法の臨床場面で幅広く用いられている知能検査および心理検査の概要・構成を理解し、検査の実施と採点法を学習する。 （オムニバス方式／全15回） （全10回） 成人の言語検査のうち、知能検査に分類される検査の実施と採点法の演習を行う。 （全5回） 成人の言語検査のうち、心理検査演習に分類される検査の実施と採点法の演習を行う。	別表 1 言語とコミュニケーション	
専門基礎科目	こころと言語の科学 カウンセリング	カウンセリングには相談・助言の意味がある。相談的対話によってカウンセラー（相談者）はクライアント（来談者）を理解し、適応や人格的成長を援助する。また、カウンセリングには語源的に反省、熟考などの意味もあり、カウンセラーはクライアントとの対話とコミュニケーションを通して、クライアントの自己への内的対話の促進・進化を援助する。これらカウンセリングの心理学についての入門的・概観的講義を行う。	別表 1 心の働き	

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
（言語聴覚学） 専門科目	言語聴覚障害学総論	言語聴覚障害の特徴を理解した上で、機能的な問題に加え、日常活動の制限や社会参加の制約をもたらすことを学ぶ。言語聴覚障害に対する言語聴覚士の役割を学ぶ。また、これらの学習を通して言語聴覚士に求められる資質、責任を学ぶ。チーム医療の基礎能力を身につけることを目的に、グループ学習を通して他者と協同することの重要性を学ぶ。	別表 1 言語聴覚障害学総論	
（言語聴覚学） 専門科目	言語聴覚障害診断学演習	言語聴覚障害概論や各障害学・評価演習を踏まえ、言語障害の種類その原因疾患、障害の発現メカニズムを理解し、障害の特徴及び診断法を学ぶ。評価結果を解釈し、機能的な側面に加え、対象者の日常生活に与える影響を考察する過程を学ぶ。	別表 1 言語聴覚障害学総論	
（言語聴覚学） 専門科目	言語聴覚障害学総論	外部施設での臨床評価実習の前段階として、学内および臨床現場において教員立ち会いの下に、実際の症例に対して言語聴覚療法の演習を行う。臨床家として必要な基礎的な能力（身だしなみやことば遣いに留意できる、協力下さる症例やそのご家族に配慮できる、検査や訓練の準備を滞りなく行いスムーズに実施できる、等）を身につけることを目的とする。この演習において、これまで学んだ各領域の知識、技能を統合することを学習する。	別表 1 言語聴覚障害学総論	
（言語聴覚学） 専門科目	言語聴覚障害学総論	言語聴覚障害に関わる今日的課題を設定し、その課題について研究するための方法論について学ぶ。まず、研究とは何かについて整理し、どのような研究方法があるのか、具体例について先行研究を参考に研究方法について検討する。学生は各自が興味を持った文献について、文献抄読・発表・討論を行い、言語聴覚研究の準備を開始する。さらに、研究活動を行う上で研究の公正を守らなければならないことや科学研究を臨床の場で行うためには倫理審査やインフォームド・コンセントといった具体的な手続きが不可欠であるといった研究倫理を理解する。	別表 1 言語聴覚障害学総論	
（言語聴覚学） 専門科目	言語聴覚障害学総論	言語聴覚障害領域および関連領域において発生した諸問題の中から、自らの関心に基づいて研究を行う。言語聴覚療法の対象者の臨床に寄与するテーマを卒業論文中間発表会を経て設定する。担当教員の指導のもと、研究計画を立案し、それに基づき情報収集、調査分析、実験、結果の整理、考察等を行い、卒業論文を作成する。論文作成と同時に卒業論文口頭試問を行う。	別表 1 言語聴覚障害学総論	

授 業 科 目 の 概 要							
(保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻)							
科目 区分		授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考		
(言語聴覚学) 専門科目	言語聴覚療法管理学	言語聴覚臨床総論	言語聴覚療法の現状を理解し、今後、求められる資質、知識、技術、責任を理解することができる。臨床に従事してからの最新の技術・知識・情報などをインプットし、それらを対象者に還元していく姿勢の大切さを理解する。それらの姿勢が対象者・その家族を支援する上で重要であることを理解する。言語聴覚療法の現状を理解し、今後臨床で求められる言語聴覚士としての姿勢を学ぶ。対象者またはその家族を中心とした言語聴覚療法を展開できるための姿勢を学ぶ。 (オムニバス方式／全15回) (全3回)	別表 1 言語聴覚療法管理学			
			言語聴覚士の社会的責任を理解し、臨床現場や地域における役割を学ぶ。卒後のキャリア形成について学ぶ。 (全3回)				
			維持期・生活期の言語聴覚士の臨床について学ぶ。言語聴覚士の職業倫理や社会的活動の大切さを学ぶ。 (全3回)				
			医療保険・介護保険上での言語聴覚療法の役割や制度的仕組みを学ぶ。 (全3回)				
			回復期の言語聴覚士の臨床について学ぶ。臨床業務の実際を学び卒後の臨床のイメージを形成する。卒後教育の大切さを理解し、専門職としての生涯学習の重要性を学ぶ。 (全3回)				
			急性期の言語聴覚士の臨床について学ぶ。EBPに基づいた言語聴覚療法の重要性やそれに伴う医療の質の担保やリスクマネジメントについて学ぶ。				
			神経心理学の知見をベースに高次脳機能障害の中核をなす失語症の歴史や脳の古典的言語領域について整理する。そして、失語症の言語症状と失語症候群およびその評価と訓練について学ぶ。さらに、失語症のグループ訓練をはじめ、失語症者の心理的問題や社会参加などについて幅広く学ぶ。				
			神経心理学と神経科学の知見から高次脳機能の神経メカニズムについて理解を深める。 脳が損傷を受けたために、言語、行為、認知、記憶、注意、遂行機能、社会的行動などの高次の精神機能が障害された高次脳機能障害について学修する。具体的には視覚・聴覚および触覚認知の障害（失認）、視空間認知障害、行為・動作の障害（失行）、身体意識・病態認知の障害、記憶障害、注意障害、前頭葉機能障害（ワーキングメモリ機能、遂行機能）、脳梁離断症状、社会的行動障害などの神経学的背景、症候について学ぶ。認知症の診断・評価およびリハビリテーションの実際についても理解する。 さらに、高次脳機能障害者の社会参加（就学・就労）の問題についても学ぶ。				
			失語・高次脳機能障害学			別表 1 失語・高次脳機能障害学	
			失語・高次脳機能障害学			高次脳機能障害学	別表 1 失語・高次脳機能障害学

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
（言語聴覚学） 専門科目	失語・高次脳機能障害学	失語症評価演習	失語症および周辺症状の評価において臨床上高頻度 に使用される基本的な検査を深く理解し、その実 際について演習する。具体的には、言語障害に対す るスクリーニングテスト、総合的失語症検査、言語 機能障害に関する各種のディープテスト、コミュニ ケーション能力検査などである。	別表 1 失語・高次脳機能障 害学
（言語聴覚学） 専門科目	失語・高次脳機能障害学	高次脳機能障害評価演習	失語以外の他の高次脳機能障害（記憶障害、注意 障害、失行、失認、遂行機能障害、前頭葉機能障 害、認知症）について、一般的な評価・診断の原則 を概説する。検査実施上の注意点、観察のポイント 、検査結果の整理と解析方法についても概説する。	別表 1 失語・高次脳機能障 害学
（言語聴覚学） 専門科目	失語・高次脳機能障害学	失語症治療学	「失語症学」と「失語症評価演習」で学んだ知識 と技術を基に、失語症者へのリハビリテーション的 アプローチについて、障害の全体像を把握し、各種 検査結果から抽出された問題点に沿った代表的な訓 練法について学ぶ。さらに失語症者への言語治療の 原則や各期治療計画の立て方および治療効果のア ウトカム測定方法について学修する。また、失語症の リハビリテーションの実際と、失語症者の生活向上 や支援および社会参加の促進について考える。	別表 1 失語・高次脳機能障 害学
（言語聴覚学） 専門科目	失語・高次脳機能障害学	高次脳機能障害治療学	「高次脳機能障害学」と「高次脳機能障害評価演 習」で学んだ知識と技術を基に、高次脳機能障害例 へのリハビリテーション的アプローチについて、障 害の全体像を把握し、各種検査結果から抽出された 問題点に沿った代表的な訓練法について学ぶ。さら に高次脳機能障害者への治療原則や各期治療計画 の立て方および治療効果のアウトカム測定方法につ いて学修する。 また、高次脳機能障害のリハビリテーションの実 際と、高次脳機能障害者の生活向上や支援および社 会参加の促進について考える。	別表 1 失語・高次脳機能障 害学
（言語聴覚学） 専門科目	言語発達障害学	言語発達障害学	小児言語聴覚障がい阻害要因を通して、言語発 達障がいのタイプ、発生機序、症状、評価・診断・ 支援の原則と流れについて学ぶ。 （オムニバス方式／全15回） （全11回） 言語発達障害およびコミュニケーション障害の概観 を学ぶ。また、知的障害、自閉症スペクトラム障 害、注意欠如。多動性障害、脳性麻痺・重複障害、 小児の後天性高次脳機能障害の発生機序、症状、評 価・診断・支援の原則と流れについて理解する。 （全4回） 特異的言語発達障害、限局性学習障害の発生機序、 症状、評価・診断・支援の原則と流れについて理解 する。	別表 1 言語発達障害学

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
（言語聴覚学） 専門科目	言語発達障害学	言語発達障害学で学んだ知識をもとに、言語発達障害児に用いられる代表的な検査の概要、構成を理解し、検査の実施～解釈までの基礎的知識を習得する。情報収集～評価結果のまとめまでの流れやポイントを学んでいく。更に言語発達障害の原因別評価方法について学ぶ。指導・訓練については子どもの発達段階、障害特性の評価から訓練プログラムの立案を行う。また、対象児の能力評価が適切に行えるよう面接技法を演習的に習得する。 （オムニバス方式／全15回） （全13回） 評価のための基礎として基本統計を演習的に復習する。そして、言語発達障害学で学んだ知識をもとに言語発達障害児に用いられる代表的な検査の概要、構成を理解し、検査の実施～解釈までの基礎的知識を習得する。情報収集～評価結果のまとめまでの流れやポイントを学んでいく。 （全2回） 発達性読み書き障害や発達障害の代表的な検査の概要、構成を理解し、検査の実施～解釈までの基礎的知識を習得する。	別表 1 言語発達障害学	
（言語聴覚学） 専門科目	言語発達障害学	言語発達障害児1人ひとりの状況とニーズにあった支援方法について学ぶ。 （オムニバス方式／全15回） （全8回） 言語発達障害児の指導には発達段階に即した指導と障害特性に応じた指導方法があり、さまざまな指導技法も提唱されている。まず発達段階に即した指導法と代表的な指導・支援方法について、理論的背景とその実際について学び支援の方法を習得する。子ども1人ひとりの状況とニーズを知り、その子に合った支援を行えるよう、各ライフステージにおける支援の方法についても考慮する。 （全7回） 障害特性に即した指導法と代表的な指導・支援方法について、理論的背景とその実際について学び支援の方法を習得する。また、北陸の療育システムの実際と課題を知るために、学生がグループ単位で現況調査を行い、まとめる演習を実施する。	別表 1 言語発達障害学	
（言語聴覚学） 専門科目	言語発達障害学	乳幼児から児童期の言語発達障害児への指導に際して、子どもたちの発達や障害特性に応じた指導を行うためには、指導計画の立案、教材の選択や制作、その使用方法の熟知が必要である。市販の教材・教具に頼るだけでは不十分である。子どもたちの特性を理解し、特性を考慮した教材・教具の作成が必要になる。実際の指導・治療場面で子どもに応じた適切な指導ができることを目標に、どのような指導方法が適切か、子どもの興味関心を引く教材は何かを考え作成し、作成したものを使って子どもたちが楽しんで指導が受けられるような技能を養う。 また、発達段階に応じた絵本の選択法と読み聞かせの仕方について演習を行う。	別表 1 言語発達障害学	

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
（言語聴覚学） 専門科目	発声発語・摂食嚥下障害学	病理音声学 発声発語・摂食嚥下の障害の発現機序を学修する。運動性と器質性の発現機序と症状の違いと特徴を理解し、機能訓練の方法がそれによって異なることを理解する。また、障害の種類によっては、一旦障害が生じると、発声発語、摂食嚥下の問題が生じること、また、コミュニケーションへの支障が出現することを理解する。このことが評価の助けになるのはもちろん、訓練の対象になることを学修する。さらには、QOLの低下につながることも理解し、その問題の解決への支援も言語聴覚士の役割であることを学ぶ。 （オムニバス方式／全8回） （全4回） 発声発語器官の障害の発現機序を学修し、運動性障害と器質性障害における病態の違いについて学ぶ。発語器官の問題が、コミュニケーションへ与える影響を理解し、心理的問題及び社会的問題について学ぶ。 （全4回） 摂食嚥下に関連する器官や神経について学修し、正常な嚥下機能について学ぶ。それらの器官・神経の問題が患者に与える影響を摂食嚥下の側面から理解をする。	別表1 発声発語・摂食嚥下障害学	
（言語聴覚学） 専門科目	発声発語・摂食嚥下障害学	発声発語障害治療学Ⅰ（小児） 構音障害とは、話しことばの特定の音が正しく発音されず、それが程度固定化している状態をいう。子どもの構音障害は、原因は何であれ発達途上の問題であり、その理解と対応には言語獲得後に生じた成人の構音障害とは異なる視点が必要である。 （オムニバス方式／全15回） （全12回） 小児の構音障害の機能性構音障害と口唇口蓋裂を中心とした先天性要因による器質的構音障害について学習する。 （全3回） 口腔・咽頭がんなどの後天性要因による器質性構音障害について学習する。 （全2回） 子どもの構音障害を理解するために必要と思われる、音韻の発達や発声発語器官の発生や構造などの基礎的知識と、評価から訓練までの臨床的概略について学習する。	別表1 発声発語・摂食嚥下障害学	
（言語聴覚学） 専門科目	発声発語・摂食嚥下障害学	発声発語障害治療学Ⅱ（成人） 音声学および病理音声学で学んだ発声発語器官の運動とその異常を踏まえ、運動障害性構音障害の臨床上的特徴および評価・訓練技法を学ぶ。運動性構音障害においては、障害のタイプによって適用すべき訓練手技が異なり、不適切に行えば、悪化させることもあるので、きちんと理解しなければならない。多くの場合、発話の明瞭度低下は完全には回復しない。そのために、代償手段とその適用指導についても十分学ばなければならない。同時に、明瞭度に制限がある状態での社会参加に対しては、地域社会の側の理解と協力が不可欠で、そのための支援についても理解する。	別表1 発声発語・摂食嚥下障害学	

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
（言語聴覚学） 専門科目	発声発語・摂食嚥下障害学	音声学および病理音声学で学んだ発声発語器官の運動とその異常を踏まえ、運動障害性構音障害の臨床上的特徴および評価・訓練技法を学ぶ。運動性構音障害においては、障害のタイプによって適用すべき訓練手技が異なり、不適切に行えば、悪化させることもあるので、きちんと理解しなければならない。多くの場合、発話の明瞭度低下は完全には回復しない。そのために、代償手段とその適用指導についても十分学ばなければならない。同時に、明瞭度に制限がある状態での社会参加に対しては、地域社会の側の理解と協力が不可欠で、そのための支援についても理解する。 （オムニバス方式／全15回） （全8回） 音声障害の鑑別と、声の症状を中心に的確に評価するための検査方法について実践的に理解した上で、声の衛生指導を含む音声治療について具体的な手技を通じて理解する。最後に、代償手段について学ぶ。 （全2回） 吃音の多面的な評価と治療について学修し、それらの実践方法について理解する。 （全5回） 吃音の発生機序や症状、評価、診断、支援の原則について学習する。吃音者が抱える心理的・社会的問題、環境調整の重要性について理解する。	別表1 発声発語・摂食嚥下障害学	
（言語聴覚学） 専門科目	発声発語・摂食嚥下障害学	正常な摂食嚥下機能とその加齢性の変化を学ぶ。摂食嚥下障害の障害メカニズムを学ぶ。摂食嚥下障害に伴う問題やリスクを学ぶ。摂食嚥下障害の基本的な臨床の流れを学ぶ。	別表1 発声発語・摂食嚥下障害学	
（言語聴覚学） 専門科目	発声発語・摂食嚥下障害学	音声学、発声発語系医学の知識を踏まえ、発声発語障害の評価の実践を、演習を通じて学修する。 発声発語における構音運動は、複数の器官の複雑な協調運動であることを学び、それらの器官について、運動範囲・筋力、運動の速さ・正確さなどの側面を評価する必要があることを学修する。さらに、適切な訓練法を選択するためには、適切な評価を選択して実施できることが前提となり、評価方法を誤ると症状の回復に影響を与えることを理解する。発声・発語器官の検査は演習を通じて学ぶ。 （オムニバス方式／全15回） （全10回） 成人の発声発語障害について、構音運動に必要な発語器官の運動評価について学び、それぞれの器官を評価する手技について演習を通じて理解する。 （全5回） 小児の発声発語障害について、構音検査・鑑別検査を通じて発語器官の評価を学ぶ。	別表1 発声発語・摂食嚥下障害学	

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
（言語聴覚学） 専門科目	発声・発語・ 障害・摂食・嚥下	摂食・嚥下評価演習	摂食嚥下障害は、誤嚥など生命に直結するリスクがあり、正確な評価が予後に影響することが少なくない。また、正確な評価は、対象者のQOLを向上させる上でも重要となる。正常な摂食嚥下機能の知識をベースとし、正確な評価技術の習得を目的とする。また、摂食嚥下障害で起きうるリスクについての安全管理についても学ぶ。スクリーニング検査などは、演習を通じて学ぶ。	別表 1 発声発語・摂食嚥下 障害学
（言語聴覚学） 専門科目	発声発語・ 摂食・嚥下障害学	摂食・嚥下障害治療学	摂食嚥下機能の基本的な知識をベースとし、患者の病態に合わせたリハビリテーションを提供する重要性を理解する。間接的訓練、直接的訓練、家族の指導などの種類や訓練方法を理解し、実践を通して習得をする。 （オムニバス方式／全15回） （全12回） 成人の脳卒中や神経筋疾患に伴う摂食嚥下障害に対するリハビリテーションについて講義を行う。間接的訓練、直接的訓練や訓練に伴うリスク管理について講義を行う。 （全3回） 小児の摂食・嚥下運動とその障害の特徴を理解しながら小児の摂食・嚥下障害の治療法を学修する。	別表 1 発声発語・摂食嚥下 障害学
（言語聴覚学） 専門科目	聴覚障害学	成人聴覚障害学	聴覚障害は他の言語・コミュニケーション障害に合併することも多く、その鑑別診断が重要となる。聴覚障害の特徴を理解し、重症度や発症時期、コミュニケーション手段などによる多様性を学ぶ。さらに聴力や聴覚障害全体の評価と機能回復訓練だけではない、障害の啓発や社会参加支援についても学修する。	別表 1 聴覚障害学
（言語聴覚学） 専門科目	聴覚障害学	聴覚障害評価演習	聴覚障害の特徴を理解したうえで、聴覚検査法の種類とそれぞれの目的、方法、対象を学ぶ。検査結果を評価して言語聴覚臨床に役立てるようにする。特に基本検査である標準純音聴力検査については、検査を正確に実施できるように実習を行う。	別表 1 聴覚障害学
（言語聴覚学） 専門科目	聴覚障害学	小児聴覚障害学	乳幼児期の聴覚障害が情報障害やコミュニケーション障害を生じ、それが言語発達や全体の発達に与える影響を理解したうえで、聴覚障害の評価と子どもの発達に合わせた指導と保護者や家族への支援方法を具体的に学修する。 （オムニバス方式／全15回） （全8回） 小児聴覚障害が言語発達や全般的発達に与える影響を理解し、聴覚障害の評価と子どもの発達に合わせた指導、保護者や家族への支援方法を学ぶ。 （全7回） 重複障害児の評価と支援、乳幼児への人工内耳の適応、調整、言語指導、長期的な支援の方法について学ぶ。	別表 1 聴覚障害学

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
（言語聴覚学） 専門科目	聴覚障害学	聴覚障害児・者のコミュニケーション行動の評価とリハビリテーションのための具体的な技術を習得することを目的とする。言語聴覚士としての訓練・支援方法を実際に使用できる技術として獲得する。 （オムニバス方式／全15回） （全8回） コミュニケーション訓練、聴能訓練、環境調整の具体的方法について学修する。 （全7回） 聴覚障害児・者への情報保障、環境調整について学ぶ。聴覚障害児・者の評価と分析、訓練や支援方法を立案する演習を行う。	別表 1 聴覚障害学	
（言語聴覚学） 専門科目	聴覚補償学	聴覚障害児・者に対する聴覚補償方法や援助方法について理解し、調整および装用指導や装用効果測定ができることをねらいとする。また、人工内耳については、その原理と補聴器との違いを説明し、人工内耳の適応、コード化法、マッピングを含め人工内耳のリハビリテーションについて習得する。	別表 1 聴覚障害学	
（言語聴覚学） 専門科目	地域言語聴覚療法学	日本では人口の少子高齢化に加え、価値観の多様化などもあり言語聴覚障害をもつ対象者の環境も大きく変化してきている。言語聴覚士には、言語聴覚障害をもつ対象者やその家族が地域社会で自分らしく生活ができるよう支援を行うことが求められている。授業では、地域言語聴覚療法の概要、言語聴覚障害ごとの地域言語聴覚療法の特徴などを学ぶ。	別表 1 地域言語聴覚療法学	
（言語聴覚学） 専門科目	地域言語聴覚療法演習	地域言語聴覚療法学で学習した内容を踏まえ、言語聴覚障害をもつ対象者の地域生活による問題を捉え、それらに対して言語聴覚士として行うことができる支援やアプローチを考えることにより、地域言語聴覚療法についての理解を深める。グループワークを通して、ディスカッションすることでよりよい方法を見出す姿勢も同時に学ぶ。	別表 1 地域言語聴覚療法学	
（言語聴覚学） 専門科目	臨床実習	社会人としての適切な振舞い以外に、障害を持つ方へ接するうえでの基本姿勢を身に付ける。また、言語聴覚士として必要な基礎及び専門科目と、選択科目で学んだ内容が臨床場面で実際に活用されている様子を理解することを主な目的とする。 具体的には、言語聴覚療法対象者がいる施設にて臨床実習指導者の指導・監督のもとで、臨床実習指導者が行う言語聴覚療法を見学あるいは一部実施する。課題は対象者の情報と心身の状態や行動の観察を行い、疾患による言語聴覚や摂食嚥下への影響（病態）を考え、病歴（障害歴）を適切な表現を用いて記述する。さらに、対象者との会話を通して、対象者の全体像を把握し、情報を収集する。	別表 1 臨床実習	実習時間の三分の二以上は医療提供施設において行う。また、医療提供施設において行う実習のうち八単位以上は病院又は診療所において行う。

授 業 科 目 の 概 要				
（保健医療学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	指定（認定）規則 別表上の教育内容	備考
（言語聴覚学） 専門科目	臨床実習	臨床評価実習 実際の医療場面で初めて行う長期実習である。医療従事者としての障害を持つ方を中心に据える姿勢を身に付ける。また、言語聴覚士として必要な基礎及び専門科目と、選択科目で学んだ内容を臨床場面で活用し、対象者が抱える問題の全体像を理解しようとする姿勢を身につけることを目的とする。 具体的には、言語聴覚療法対象者がいる施設にて指導者の指導・監督のもとで、指導者が行う言語聴覚療法を見学あるいは一部実施する。課題は対象者の心身状態や行動の観察、情報の収集、病歴（障害歴）記述、検査の実施と所見記述、言語聴覚や摂食嚥下の問題点の列举と明確化、言語聴覚療法訓練の目標設定とする。目標設定には在宅復帰や社会参加を含めた長期の視点が含まれる。	別表 1 臨床実習	実習時間の三分の二以上は医療提供施設において行う。また、医療提供施設において行う実習のうち八単位以上は病院又は診療所において行う。
（言語聴覚学） 専門科目	臨床実習	臨床実習Ⅰ 臨床評価実習の目的に加え、関連職種との連携強化、対象者が抱えている問題の詳細な分析及び解決技能を身につけることを目的とする。 具体的には、言語聴覚療法対象者がいる施設にて指導者の指導・監督のもとで、指導者が行う言語聴覚療法を見学あるいは一部実施する。課題は対象者の心身状態や行動の観察、情報の収集、病歴（障害歴）記述、検査の実施と所見記述、言語聴覚や摂食嚥下の問題点の列举と明確化、言語聴覚療法訓練の目標設定、訓練（目標、課題）の立案、実施とする。目標設定には在宅復帰や社会参加を含めた長期の視点が含まれる。	別表 1 臨床実習	実習時間の三分の二以上は医療提供施設において行う。また、医療提供施設において行う実習のうち八単位以上は病院又は診療所において行う。
（言語聴覚学） 専門科目	臨床実習	臨床実習Ⅱ 言語聴覚士として施設の中で多職種と連携しながら、対象者が抱えている問題の詳細な分析を行い、臨床現場に即した解決技能を身に付けることと臨床現場における課題の把握を目的とする。 具体的には、言語聴覚療法対象者がいる施設にて指導者の指導・監督のもとで、対象者の情報と心身状態や行動の観察に加え、検査を実施し、評価と鑑別診断を行い、訓練・指導を考え、実践する。課題は対象者の身体・行動の観察、情報収集、検査の実施、問題点の列举、訓練（目標、課題）の立案、実施、再評価計画の立案とする。再評価の実施は実習状況に応じて選択的に行う。機能回復にとどまらず、生活支援や社会参加の支援を念頭に置いた訓練を実施し、現在の臨床現場や社会の問題点についても考察する。	別表 1 臨床実習	実習時間の三分の二以上は医療提供施設において行う。また、医療提供施設において行う実習のうち八単位以上は病院又は診療所において行う。